

伊方原発再稼働 住民の不安置き去りか | どうしんウェブ／電子版（社説）

伊方原発再稼働 住民の不安置き去りか

08/13 08:55

四国電力はきのう、伊方原発3号機（愛媛県伊方町）を再稼働させた。

原子力規制委員会の新基準に適合した原発は九州電力川内1、2号機（鹿児島県）、運転差し止め中の関西電力高浜3、4号機（福井県）に続いて5基目となる。

伊方原発は日本最大規模の活断層「中央構造線断層帯」に近い。このため、巨大地震の影響を受ける恐れを以前から専門家が指摘してきた。

しかも、原発が半島の付け根に位置することから、いったん過酷事故が起きれば、半島の住民の避難が困難を極めるのは必至だ。

再稼働を不安視する声は強い。そうした住民の思いを置き去りにしてまで運転することに、疑問が尽きない。

そもそも伊方原発は地理上の問題がある。

原発の北に横たわる中央構造線断層帯は、熊本地震後に活発化しているとの指摘がある。南には南海トラフ巨大地震の震源域が存在する。

松山、大分、広島の各地裁には住民らが運転差し止めを求めて仮処分を申し立てている。東日本大震災を踏まえれば、心配は当然だろう。

しかし、四国電力にこうした動きを顧みる姿勢は見られない。地震の揺れを厳しく想定したというが、地震想定は専門家の間で解釈が異なる。

原発事故時の避難計画も机上の空論と言わざるを得ない。

伊方原発があるのは、東西に横長に延びる佐田岬半島だ。半島で原発西側に住む約5千人は陸路で避難する場合、いったん付け根の原発に近づくことになる。

そうかといって、船で対岸の大分県側などに避難するにも、津波や地震で岸壁が壊れたりすれば、接岸すら難しい。

南海トラフ巨大地震が同時発生すれば、避難計画そのものが意味をなさなくなるのではないか。住民の不安と向き合っているとは到底言えない。

伊方3号機の燃料の一部にプルトニウム・ウラン混合酸化物（MOX）燃料を使うことも問題だ。

プルトニウムは毒性が強く、過酷事故時の被害の拡大が懸念される。専門家は、運転時に制御しにくくなる恐れも指摘している。

2016/8/17

伊方原発再稼働 住民の不安置き去りか | どうしんウェブ／電子版（社説）

それにしても、5年前にあれほど深刻な福島第1原発事故を経験しながら、なぜ、国も電力業界も再稼働に前のめりなのか。住民と向き合い、再考すべきだ。

